

音楽の授業づくり過程にみる教師の『音楽的な学力』観

池田邦太郎教諭¹とそのスタッフ²の場合

阪井 恵

平成11年度の全日音研³東京大会小学校部会において、池田邦太郎教諭の公開授業が行われた。筆者は、公開授業当日までの約2ヶ月間、池田教諭とそのスタッフに加わり、8時間の授業すべてと、それをめぐる合計20余時間の検討会に参加した。本稿では、その記録から、池田教諭とそのスタッフが「音楽の授業を通じて、子ども達のどのような力を育てたいと考えているのか」、換言すれば、この教師達が「音楽科で育てるべき『学力』をめぐってどう考えているのか」について書く。資料としては、ひとつの題材による一連の授業の記録(メモと映像)、授業の前後に行われたディスカッションやインフォーマルな面接質問の記録を用いる。本稿は、ひとつの事例報告である。

I 授業の概要

授業は、大会の会場校である台東区立浅草小学校で、同小6年生の児童(男子16名・女子18名)を対象におこなわれた。題材および指導計画の案は、授業者・池田邦太郎教諭によるものである。以下に、第8時間目に当たる公開授業の指導案を載せる。

[学習指導案]

『環楽器』を使って音を楽しもう

—— 音や音楽について考え、友達と音楽づくりをする ——

授業者：本町田西小学校教諭 池田 邦太郎

1 題材設定の理由

身近な環境にある机・鉛筆・紙・石等の様々な物をたたいたり擦ったりする時に出る音の中から、子供たちが選んだり工夫したりしてつくり出したお気に入りの音を、互いに聴き合う活動を授業で行っている。その音源が『環楽器』である。『環楽器』はいわゆる「楽器」としての形態や音階をもたないが、音を出す側聴く側相互の子供たちの心の中には様々なイメージが広がっている。この様な音源で音楽をつくり表現することは子供たちが音や音楽について改めて考え、音楽する上で最も大切なものは何かを感じ取ることに適していると考え、本題材を設定した。

2 題材の目標

- 音に対する新たな価値を見だし、自らつくり出した音を構成して音楽づくりをする。
- 友達の選んだ音のよさを認め、互いのイメージを広げながら、息を合わせて音楽することの楽しさや喜びを味わう。

3 題材の評価基準

(1)音楽への関心・意欲・態度

様々な音に関心をもち、友達と協力して音楽としての表現を目指そうとしている。

(2)音楽的な感受や表現の工夫

『環楽器』の音色や音質を聴き分けて奏法の工夫をしようとしている。

(3)表現の技能

音と音との響き合いを意識し、友達と息の合ったアンサンブルをしている。

(4)鑑賞の能力

『環楽器』の音色や、それらの組み合わせによる響きを聴いて楽しんでいる。

4 教材と教材選択の観点

(1)環楽器

既製の楽器のような基本的な奏法というものが無いので、新しい音の出し方や響きを考えたり発見したりするなど、子供たちの様々な表現の可能性を広げることに適している。

(2)『音・出会い (仮題)』 池田邦太郎作曲

音楽づくりの過程で子供たちから出されたアイデアを参考に作られる曲。即興的なアレンジにより短時間の練習で全員でアンサンブルを楽しむことができるように構成される。

5 指導計画 (7 時間)

第一次 (2 時間)

身の回りにある音に改めて意識を向ける。

- ・気に入った音を探してきて互いに聴き合ったり、音や音楽について話し合ったりする。

第二次 (5 時間 本時5/5)

音楽の構成要素を知り、互いに息を合わせてアンサンブルすることの大切さを感じ取る。

- ・班ごとに、奏法の工夫や音色の組み合わせや曲の構成などを考えて音楽づくりをする。
- ・自分たちの思いを生かした表現になるように工夫して班ごとの音楽を完成し発表する。
- ・『音・出会い』の構成を理解して演奏する。

6 本題材の指導に当たっての工夫

(1)教材研究

友達とのかかわり合いの中で自分なりの表現を生かせる教材として『環楽器』を取り入れ、表現の工夫における子供の自由な発想や思いを生かした。

(2)高め合う学習過程の工夫

自分の音とともに相手の音も大切にし、互いの息を合わせ、気持ちを一つにして演奏することが、アンサンブルの学習にとって最も大切であることを常に意識付けた。

7 本時間の展開 (第二次 第7時)

- (1)ねらい 『環楽器』の音色を生かした奏法を工夫し、音の組み合わせを意識して友達と息の合ったアンサンブルを楽しみながら発表する。

(2)展開

○学習内容 ・学習活動	◇教師のかかわり ☆評価
○様々な音を表現したり聴き合ったりする。 ・探した音を自分なりの出し方で、数人ずつ教室を巡りながら友達の耳元に聴かせる。 ・目隠しをして、友達の様々な音を聴く。	◇各自の音が交錯しないように、教室内の巡り方を指示する。 ◇視覚を遮った状態にすることで、音そのものに意識を集中しやすくする。 ☆音に関心をもち、聴くことを楽しんだり、音をつくり出したりする喜びを味わう。(1)
○班ごとにアンサンブルを発表し合う。 ・曲の構成が書かれているプリントを参考にしてつくった『環楽器』のアンサンブルを発表し、聴き合う。	◇静寂に始まり静寂におわるように助言する。 ◇班ごとにアンサンブルの構成などについて説明し、全員で確認する。 ◇班ごとの必要に応じて助言する。 ☆音楽の流れにのって演奏し、アンサンブルをする。(3) ☆奏法の工夫や響きの重なり、曲の構成等を感じ取って友達の演奏を聴く。(4)
○全員で『音・出会い』の演奏をする。 ・曲全体の構成を意識して音楽の流れにのり、気持ちを一つにして演奏する。	◇板書で曲の構成を確認する。 ◇自然と指揮に気持ちが集中するような雰囲気をつくる。 ☆自分と音のかかわりや自分と友達とのかかわりを確かめながら楽しんで演奏する。(1)・(2)

また、9月中旬に始まり11月11日に公開授業本番を迎えた研究授業のスケジュールは、以下の通りである。結局全体で8時間扱いとなった。

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回 (公開授業)
日時	9月18日 第2校時 第3校時	10月2日 第3校時	10月16日 第2校時 第3校時	11月6日 第2校時 第3校時	11月11日 10:00～ 10:45
	1/8・2/8	3/8	4/8・5/8	6/8・7/8	8/8

II 池田教諭の実践をリポートする

今回の研究授業には、「きわめて個性的」という評判の「池田先生らしさ」が集約されて

いたと言えそうである。記録を振り返ってみると、8時間の授業とその事前・事後検討会において、池田教諭自身が頻繁に用いるキーワード群がある。筆者はこれらのキーワードが、全体の指導計画の流れと対照して、3つのグループに分けることができると考えた。

第1グループは、**笑い・楽しさ・心の耕し**というキーワード群である。第2グループは、**音を楽しむ・音が気に入る**というキーワード群、第3グループは**静寂を大切に・息を合わせる**というキーワード群である。それぞれのグループのキーワードが、どのように用いられ、それがどのように実践に対応しているのかを述べる。尚、囲みの中は、池田教諭が公開授業当日のために作成した資料からの引用である。

◆第1グループのキーワード群：笑い・楽しさ・心の耕しに関わる場面について

○第1時間目の出来事より

音を聴くという行為の集中力を高め、能動的にするために、池田教諭やスタッフは視覚をふさいでしまう仕掛け、「目隠しバンド」を準備した。単に目を閉じることは、子ども達のストレスになるのでそれを避ける意味もある。

幅広の白いゴムをホッチキスでとめ、マジックで思い思いの目を描きます。楽しい個性的な目が描かれている目隠しバンドを使わせると、必ずどこかで笑いの声がかえってきます。“楽しい”と心が感じることは「音楽」する上での“心の耕し”につながると考えます。

スタッフの指示に従い、子ども達は目隠しバンドを作った。このバンドで目隠しをした時、丁度目に当たる辺りに各自「目」を描き入れる。開いた目、閉じた目、片方だけ開いた目、まつげ付き、少女漫画風、など多様な出来あがり、教室は3分ほど笑いとしゃべり声でにぎやかになる。

○第3時間目の出来事より

外へ出て音に耳を傾けてみよう！：「…聴かせるために用意されたんじゃない音の中にも、みんなが心地よくなれる音はないだろうか？これからそんな音を求めて外(屋上)へ出てみよう。屋上ではどんな音が聴けるだろうか？はたしてその中に『楽』しめる『音』はあるかな？」

使う道具は、各自一枚の45cm×135cmに切ったブルーシートと目隠しバンド。「屋上へ上がったなら、一人一人が心静かになれるように、お互いの間隔を2m以上あけて、周りにいる人の気配を感じないような場所を選んでシートを敷いて、その上に目隠しバンドをして寝転がってください。上履きを脱ぐととても気持ちいいよ！」

池田教諭は屋上へ出る前に確認する。「いいですか、屋上で昼寝をする目的はね、自分が心も身体もすっきりリラックスして、音に耳を傾けるってことなんだ。だから、心を静かにするのが大切なんです。」(6分程の屋上体験では、本当に眠ってしまった子が3人いた。)スタッフの検討会においても「屋上の昼寝は、僕のウリだからね。」と、この活動が授業の本質に関わる事が強調された。

○第5時間目の出来事より

ある班は、まとまった音楽作品を構成するという面で他の班に遅れをとっていた。一人一人が始めに手にした音具に固執しており、音の出し方の工夫が進まない。話し合いもせず、何をしたいのかわからないままに、中間発表の時間が近づく。各自、自分が決めた音具を黙って打つ。一人の男子は、直径8cm、長さ4m、中央で直角に曲がった雨どいを黙々とゴムぞうりで打つ。アルペンホルンのように据えられた雨どいは、打つたびにゆらゆらりと揺れ、そのたびに立て直さなければならない。そこへ池田教諭が来てこの有様に大笑いし、「おっすごいなあ。大変だなあ。だけど、いいよいいよ最高！これ最高！」子ども達も引き込まれるように笑い出した。

○第6・7時間目の出来事より

体育館の壁に6枚の手作りポスターが貼られた。みな薄桃色の和紙製で、絵の具を色彩豊かに使った文字が書かれている。それぞれに「何の音がきこえる？」「目をとじて」などとある。スタッフの検討会で、「部屋の様子や手作り楽器も、やっぱり出来るだけ美しく飾ってみるのが大切だと思う。それで心が耕される。」という見解が出た。池田教諭は「ありがと！用意してくれる？うん、こういうことがとても大切だって、このごろわかってきたんだ。」そういうわけでポスターは用意された。

○第8時間目の出来事より

前述の班は、発表の本番ではさらに2人の子どもがそれぞれ直径8cm、長さ1.2m程の雨どいを持ち、ちゃんばらスタイルで打ち合わせ始めた。ブーン、ブーンという音と振りかぶる体の動きが交互に一定のリズムを成し、そこに他の音が重なっていく。演奏が終わると池田教諭は率先して拍手。班のところに行き、参観者に向かい「この班は、こうして長いトイを打ったらそれが揺れたり、こうしてちゃんばらするのが、やってみたら面白かった、楽しかったんですね。音楽に全然関係ないことでも良いんです。こうして楽しい、ってことで子どもたちの心が開くんです。うん、良かったよ！」と話した。

第1グループのキーワード群は、このように8時間の授業すべてを通じて頻繁に用いられた。検討会においても、曲づくりをどう導くかについては各班各様の問題が出されたが、子どもたちが自由に何かやり、面白くて笑いが出た場面は、すべて前向きに考えられた。楽しさ→笑い→心の耕しという構図ができるだろう。

◆第2ステージのキーワード群：音を楽しむ・音が気に入るに関わる場面について

○第2時間目の出来事より

「今から目隠しバンドをして先生の持ってきた音を聴いてもらいます。でも、これは音当てじゃないんだ。だから、聴こえてくる音の音色や響きだけに心を集中させて聴いてください。」

聴かせる音は、ちびエンピツ、卵の殻、一升瓶の蓋⁴、工作用紙⁵、サラダボールに水を入れた音⁶等々。スタッフ全員で一人一人の子どもたちの耳元に音を聴かせて廻ります。

静まり返った教室内、子どもたちの席の間を、スタッフが音源を持ち音を出しながら廻

っていく。当初の予定と異なり、実際には、【UFO】⁷、【マリ缶】⁸、プラスチック製のくし、ゆで卵カッター、それから飲料のアルミ製空き缶から切り取った小アルミ片をタイルの床にまきちらす音。どれも音量が小さく、日常生活においては意識されにくい音である。この日の気温は真夏並み、始め教室の窓は全開だったが、これらの音を聴くためには外がうるさすぎ、スタッフは窓を閉めきった。音を聴く時間は3.5分程。

何の音だったか種明かしはすぐに行われた。そして池田教諭は

「今の音の中に、もういっぺん聴いてみたいと思う“気に入った音”と、もう聴かなくてもいい“あまり気に入らなかった音”があったと思います。その音を気に入った人、つまりその『音』を『楽』しめた人がいましたね。それがその人にとっての『音楽』になるんだよ。」と、ここは板書してわかりやすく強調する。「だから、自然の波や風の音をいい音だなと感じる時、それは、その人にとっての『音楽』になるっていうことなんだよ。」

○第3時間目の出来事より

「まずは目隠しバンドでこの音を聴いてください。」聴かせるのは【水道管ポムポム】⁹の音。【ポムポム】の二つの音を操りながら、楽しく愉快なリズムを耳元に聴かせて子どもたちの間を歩き回る。この音、気に入ってもらえたかな？さあ、その『音』を『楽』しめた人にとってそれは…そう『音楽』

【ポムポム】をひとつずつ渡された子どもたちは、一斉に音を出し始める。双眼鏡のようにして向こう側をのぞく男子がいる。友だちと、【ポムポム】の長さの違いを見せ合いながら、試奏する子がいる。ほとんどの子どもたちは、笑顔で自分の楽器の音ためしをしている。【ポムポム】を持ったほうの手を主に動かす子と、【ポムポム】はほとんど動かさず、もう片方の手で打つ子がいる。2分ほど、【ポムポム】が鳴り続けた。

○第8時間目の出来事より

世の中にはいろんな『音』があるけれど、その『音』を『楽』しめた時初めてそれが『音楽』になるんだ…。誰か言ってたよね、「隣から聞こえるピアノ。すごくきれいな音楽なんだと思うけど、勉強しようと思ってたわたしにはじゃまだった。」つまりきれいな音楽だって時と場合によっては『騒音』になるってことだったよね。

つまり、音楽にとって一番たいせつなことは、『音』をどんな風を感じとることが出来るかその『心』のありようだってことなんだよね。

公開授業の半ば、これから各班の発表が始まろうとしている。池田教諭は子どもたちに、「さてこれまで君たちは、いろんな音を聴き、一人一人が気に入った音を選びましたね。ということは、すでに君たちはその『音』を『楽』しめるわけだから、それで『音楽』なんだ。今日やるのはその一人一人の音楽をみんなの音楽にするために、いろんな取り組みをするんだね。」と話す。

授業当日のため、人の移動が多くざわざわしがちだ。各班の発表に際して、演奏開始時に何か物音がするとやり直しにした。参観者を含めて、全員が可能な限りの静寂（外からの雑音はなくならなかった）を意識したところで、初めて演奏を開始させた。

公開授業の最後に、【スラホイ】による『音・出会い』（池田教諭の指揮による）の演奏が行われた。各班が【スラホイ】に固定されたへ・イ・ロ・ニ・ホのうちの1音を受け持つ。一人一人は指揮者の指示でフツ、フツ、などと吹けばよい。しかし音を出すタイミング、息遣いとタンギングは、指揮者と全員が息を合わせなければ出来ない。静寂に始まった曲は、【スラホイ】の音を厚く薄く重ねたり、沈黙との対比を生みつつ40秒間続き、再び静寂に終わった。池田教諭と、そして仲間と合わせられなかった子はいなかった。

第3グループのキーワード群は、曲を構成しつつ演奏する、あるいは練り上げたものを演奏する段階になって用いられるもので、「アンサンブルの極意」を伝える。しかしたとえば、第4時間目の池田教諭のピアノ即興演奏や第8時間目の『音・出会い』の演奏、そしてその時その場にいた人々の反応などを振り返ってみよう。ここで言う「アンサンブル」とは、演奏者どうしだけでなく、「演奏者と聴き手が一体化したところに成立するものとしてのアンサンブル」とまで範囲を広げて考えられるのではないだろうか。

III 池田教諭とそのスタッフの「『音楽的な学力』観」

池田教諭の授業は題材名「『環楽器』を使って音を楽しもう」の通り、音を楽しむことにねらいがあり、曲をつくるプロセスをあまり重視していない。音楽的な活動に関わるキーワード群は、「音との出会い」に関わる第2グループと、「演奏」に関わる第3グループに分かれている。授業における学習活動の組織という観点から見ると、曲をつくる前段階と、最終段階に近いところに手厚く、途中の推敲の過程には手薄い、とも言える。実際、曲づくりにおいては「曲の形」プリントが始めから配布され、子どもたちはプリントの例を参考にするというより、そこから選択するというやり方をした。曲の構成や音色どうしの組み合わせについての、子どもたち自身の推敲はそれほど重要視されず、「気に入った音」を自分なりに用いることが最優先だった。池田教諭とそのスタッフは、こどもの中間発表を聴き、そのアイデアを使って、惜しみなくどんどんアドバイスを。「せっかく良い音なのに一緒に出すと互いに消してしまう。音色の違いをもっと出すために、すっかり重ねないで。途中、みんなでぱっと消えて、また一斉に入ってみて。」あるいは「同じ音の強さが続かない方がいいね。強くー、弱くーをつけて、全体を2回繰り返してみて。」あるいは「小さい音を大事にしているね。面白い音もたくさんある。だから途中でどれか1つだけのソロの部分、または2つだけのデュオの部分を入れてみて。」という風である。

今、曲づくりを題材に公開される授業のほとんどは、曲の構成法、音のパラミータの組み合わせ方を、いかに考えさせるかを主眼にしている。これを考えるために、評価の安定した音楽作品（検証楽曲という）を聴き、またそれをより良く聴くために自分たちでつくってみる、という指導計画が多い。筆者は質問した。「池田さんがどんどんやってしまうのは、今回は主眼が違っているからなの？時間も限られているからなの？」これに対して、「僕は割りといつもこうなの。子どもからアイデアをもらうけれど、構成は僕なんだよ。」と述べている。つまり池田教諭の実践においては、音楽の構成要素を名称付けして理解さ

せることや、音楽の構造を考えさせることは、あまり重要ではないのだ。

では何が重要なのだろうか。

池田教諭は「どういうときに音楽なのか」を、子どもたちに問い続けている。音を楽しむこと、ある音が気に入ること、静寂を大切にすること、息を合わせることは、すべてこの問いかけに対する答えを志向するものである。「音楽は物理的な現象じゃないんだ。君たちの心のありようから生まれ、心のありようによってつかまえられるものなんだ。」ということ伝えるために、またこのことを経験させるために、子どもたちの活動が手厚く組織されている。

池田教諭とそのスタッフは、音楽科で育てるべき力をどう考えているだろうか。それは、今回の研究授業に即して言えば、音楽と一般に呼ばれているものの仕組みや機能を理解する力ではなかった。そうしたものは、音楽をより好きな子どもたちの将来の課題として、ほとんど着手されない。大切なのは、「音を媒体にしてより深く感じる力、音を聴いたり出したりしながら自分のイメージを広げる力」だと考えられている。そしてそのような力が育っていれば、未知の音世界に対した時も、自分なりの感じ取り方で「今、音を楽しんでいる。今、ここに音楽が成立している。」という状況を生み出せるだろう、と仮定されている。授業では、子どもが曲をつくるのも演奏するのも自分のためが良い、音素材を使って多いに遊び、多いに試すという体験を保証すれば良い、というのがスタッフの考え方である。そのために教材をつくり、言葉を選び、時間と労力を尽くして授業づくりをしている。

このような「『音楽的な学力』観」は、言葉の表面的なレベルでは支持されるかもしれないが、現実の授業実践において深く貫かれていることは、ほとんどない。このような「『音楽的な学力』観」とそれに導かれる実践は、どうしたら理論的にサポートできるのだろうか。今後、この大きな課題に取り組んでいく。

注

- 1 現在、東京都町田市立本町田西小学校教諭。著書「音の出るもの作ってあそぼう」（音楽之友社）。手作り楽器やサウンドスケープ研究で、『教育音楽』誌にも数10回取材されたり寄稿したりしている。教師歴20年、内始めの6年は中学校教諭。
- 2 日ごろから池田教諭と親しく、研究交流の多いメンバーで、今回の研究授業では、チームを組んで池田教諭をサポートした。鈴木久美子教諭（町田第1小）、斉藤明子教諭（四谷第6小）、横川雅之教諭（千駄木小）、山根まどか教諭（猿樂小）の4名。
- 3 全日本音楽教育研究会の略。11年度小学校部会は台東区立浅草小・金亀小の2会場20クラスにおいて公開授業が行われた。
- 4 これらのものは、それぞれ片手のひらで余裕を持ってつかめるくらいの分量ずつ、ガーゼの袋に入れられていた。
- 5 長方形の上端を持って震わせると波のような音が出る。
- 6 サラダボールに少量の水を入れ、片手でボールを持ち、下からボールの底をマレットでたたくと、ヒューーンと余韻が残る。
- 7 アルミ缶の底を貼り合わせた中にパチンコ玉を入れた音具。回すとひゅんひゅん音がする。
- 8 空き缶を2本、ボンドとビニールテープで接着したもので、中に水を入れる。上下に倒すとこぼこぼと音がする。（池田教諭発案）
- 9 2本の長さの違う塩化ビニール管を、ずらしてガムテープで巻いて固定したもの。（池田教諭

発案) 手のひらで打つとポムポムと音がする。二管の音高が異なって音程がつく。

- 10 池田教諭の手製楽器。内径 1cm の塩化ビニール管の中で、先をティッシュで巻いた割り箸をスライドさせる。音程を固定して使ってもよい。リコーダーやフルートに比べ、くぐもったような独特の音が出る。

謝辞

「熱い日々」を共にさせて下さった池田先生とスタッフの皆様に心から御礼申し上げます。